



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Fryske Akademy とフリジア語の擁護
Author(s)	清水, 誠
Citation	独語独文学研究年報, 44, 105-126
Issue Date	2018-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70507
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_06_shimizu.pdf



Fryske Akademy とフリジア語の擁護

清水 誠

1. はじめに¹

本稿は、ドイツ語圏に関係するヨーロッパの少数言語との関連で、フリジア語擁護の現状と問題点を論じることを目的とする。科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 26370471）による援助を受けて、2016 年 9 月にオランダ北部の Fryske Akademy [frískə akadé:mi]「フリスケ・アカデミー」を中心に関連諸機関を訪問した体験を織り交ぜて、西フリジア語を中心に批判的に報告することで具体例を示したい。

2. 「言語」と「方言」

一般にヨーロッパの諸言語では、English, Deutsch, français のように、言語名または方言名を「～語」、「～方言」という類別詞 (engl.² classifier) を伴わないで表すことが多い。³ それも一因となつてか、「言語」と「方言」の区別は日常的に厳密には意識されない傾向にある。Bairisch, Berndeutsch, Westfälisch などの名称は、話者自身のアイデンティティの証として用いられることもある。多数の言語や方言が軒を連ね、それぞれが古くから固有の文化的伝統を主張しているヨーロッパでは、言語学的名称としての「言語」(dt. Sprache) と「方言」(dt. Dialekt) の区別は、言語構造よりも社会言語学的基準を重視して行われるのが原則である。つまり、公的役割と標準語の規範の有無という基準なしには両者は容易に分かちがたく、両者の区別なしには言語的現実が語り得ない文化圏と言える。これはヨーロッパ諸言語の特徴である。世界の数多くの言語にこの基準を前提とするのは、あまりに無理な注文と言えよう。

ただし、ヨーロッパの言語でも社会言語学的基準だけが決め手になるとは限らない場合がある。フリジア語はその一例である。フリジア語を言語学的な意味での「言語」として主張する背後には、かつてはオランダ語やドイツ語とは異なる言語だったという事実に基づく話者の意識がある。ヨーロッパ言語圏では共時的な社会言語学的基準は重要だが、歴史言語学的背景の意義をぬぐい去ることはできない。ただし、少数言語としての存在を主張するためには、不断的努力が強く求められることになる。

¹ 本稿は筆者の研究発表「西フリジア語研究の動向と Fryske Akademy の役割」(第 82 回北海道ドイツ文学会研究発表会 2016. 12. 10. 北海道大学文学研究科)を基にしている。

² 略語は次のとおり: engl. 英語、dt. ドイツ語、ahd. 古高ドイツ語、ndl. オランダ語、wfr. 西フリジア語、nfr. 北フリジア語、saterfr. 東フリジア語 (ザーターフリジア語)、âfr. 古フリジア語、da. デンマーク語、lat. ラテン語。以上の略語は区別が必要な場合を中心に記す。

³ ただし、日本語でも「低地ドイツ語方言」/「スイスドイツ語方言」の代わりに原語にならって「低地ドイツ語」(dt. Niederdeutsch)/「スイスドイツ語」(dt. Schweizerdeutsch)と呼ぶ。

3. フリジア語群について

言語学的な意味での「言語」と「方言」をめぐる上述のヨーロッパ的基準に照らせば、「方言」という名称からは公的役割を十分に果たし得ないことが連想される。そこで、少数言語の使用者の中には、社会的威信言語の傘下 (dt. *Überdachung*) にある「方言」に分類されることを嫌う場合がある。フリジア語の話者はその好例である。

フリジア語は、北ドイツの 2 箇所とオランダ北西部の 1 箇所に分布する言語群であり、単独の言語を指す名称ではない。まず、オランダ北西部のフリースラント州 (wfr. *Provinsje Fryslân*/ndl. *Provincie Friesland*) で最大の話者を有する西フリジア語 (wfr. *Westerlauwersk Frysk*) がある。その西フリジア語名は「ラウエルス川 (wfr. *Lauwers*) 以西の (wfr. *Wester-*) フリジア語 (wfr. *Frysk*)」の意味で、話者数は推定で 35~40 万人とされている。ただし、同州以外にも話者はかなり多く、正確な話者数の査定は、話者の言語能力の問題とともに、少数言語の通例としてきわめて困難である。次に、北ドイツ、シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州の北西部で用いられる北フリジア語 (nfr. *Nordfriisk*⁴) がある。その使用地域は、北フリースラント郡 (dt. *Landkreis Nordfriesland*) の中心都市フーズム (dt. *Husum*) 以北からデンマークとの国境までの海岸部と島、そして、行政的にはピネベルク郡 (dt. *Kreis Pinneberg*) に属するヘルゴラント島 (dt. *Helgoland*/nfr. *deät Lun*) である。地域全体を覆う標準北フリジア語は現在にも過去にも存在せず、互いに大きく異なる 6 つの大陸方言と 3 つの島方言に分かれ、意思疎通は困難なほど互いに異なっている。話者数は 9,000~10,000 人と推定されているが、実際にはこれよりかなり少ないとも考えられている。最後に、同じく北ドイツで用いられている東フリジア語 (ザーターフリジア語 dt. *Saterfriesisch*/saterfr. *Seeltersk*) がある。使用地域はニーダーザクセン州 (dt. *Niedersachsen*) の北西部、オルデンプルク地方 (dt. *Oldenburger Land*) に属するクロペンプルク郡 (dt. *Landkreis Cloppenburg*) の北部に位置するザーターラント (dt. *Saterland*) である。ザーターラントは湿地帯を隔てる砂地 (dt. *Geest*) に敷かれた街道沿いの 4 つの自治体 (dt. *Gemeinde*) から成るが、使用地域はその中の 3 つの村にとどまる。話者数は約 1,500~2,500 人と推定されている。

フリジア語使用地域と誤解されやすい「東フリースラント」(dt. *Ostfriesland*) という名称は、クロペンプルク郡の北側に隣接する北海沿岸の自治体を指す。同地で用いられている *Ostfriesisch* は *Ostfriesisches Platt*、つまり、「低地ドイツ語東フリースラント方言」のことであり、フリジア語ではない。この意味では、「ザーターフリジア語」(dt. *Saterfriesisch*) のほうが当を得た名称と言える。東フリースラントでは地名

⁴ 北フリジア語は下記のように標準語を欠く 9 方言に分かれており、統一的な言語ではない。*Nordfriisk* は慣例的な便宜的総称である。後述する *Nordfriisk Instituut* の名称を参照。

の2言語表記が認可されており、中心都市アウリヒ (dt. Aurich) では Aurich/Auerk と記された標識を目にする。Auerk は Aurich の低地ドイツ語名である。同様に、オランダの「西フリースラント」(ndl. Westfriesland) という地方名は、大堤防 (ndl. Afsluitdijk) の西岸に位置する北ホラント州 (ndl. Provincie Noord-Holland) の北部の地域を指し、同地の Westfries は「オランダ語西フリースラント方言」であって、フリジア語ではない。⁵ ドイツ語名 Ostfriesisch とオランダ語名 Westfries は、かつてフリジア語使用地域だった事実を伝える歴史的名称である。⁶ 両者がオランダ語 (= 標準オランダ語の基盤である低地フランケン方言 (ndl. Nederfrankisch)) ないし低地ドイツ語とは異なるフリジア語的特徴を備えている事実は、つとに指摘されている。この地域のフリジア語の消滅は、話者の意識の変化、つまり、政治的・社会的変革によってもたらされた話者のフリジア人としてのアイデンティティの消失による。言語的特徴の残存は、程度の差はあるが、これとは別に存在している。

フリジア語は、歴史言語学の観点から北海ゲルマン語 (dt. Nordseegermanisch) に分類される古フリジア語 (wfr. Aldfrysk/ndl. Oudfries) の後裔とされる。⁷ 北海ゲルマン語は西ゲルマン語 (dt. Westgermanisch) の下位区分であり、古フリジア語のほか、古英語 (engl. Old English) と古ザクセン語 (dt. Altsächsisch/ndl. Oudsaksisch) を含んでいる。西ゲルマン語のもうひとつのグループには、内陸ゲルマン語 (dt. Kontinentalgermanisch) があり、古高ドイツ語 (dt. Althochdeutsch) と古オランダ語 (ndl. Oudnederlands) が属している。古オランダ語とは、オランダ北東部を流れるエイセル川 (ndl. IJssel) 以南の低地フランケン語 (ndl. Oudnederfrankisch/dt. Altniederfränkisch) を指し、これは現代標準オランダ語に連なっている。一方、エイセル川以北のオランダ語方言は低地ザクセン方言 (ndl. Nedersaksisch) と呼ばれ、北ドイツにまたがる北海ゲルマン語の古ザクセン語にさかのぼる。今日のオランダ語低地ザクセン方言は、標準オランダ語には直接的にはつながっていない。標準オランダ語が北海ゲルマン語的特徴を一部で共有しているのは事実だが、標準オランダ語の基盤となった古低地フランケン語は、「フランケン」(ndl. Frankisch/dt. Fränkisch) という名称が示すように、今日の中部ドイツ語 (dt. Mitteldeutsch) の主な母体となった内陸ゲルマン語の一員である。オランダ語はエイセル川を境界として、北部と南部で

⁵ ドイツやオランダの大学図書館などでは、dt. *Ostfriesische Grammatik*, ndl. *Westfries woordenboek* などの題名の書籍が誤ってフリジア語のコーナーに置かれていることがある。

⁶ こうした事情から、筆者は地理的・行政的名称として「フリースラント」、言語的・文化的名称として、ラテン語の *Frisia* に由来する「フリジア」を区別して表記することにしている。「フリースラント語」という名称は明らかに不適當である。フリースラントはフリジア語の使用地域とは限らず、フリースラント以外を使用地域とするフリジア語もあるからである。

⁷ 北海ゲルマン語とフリジア語の歴史言語学的特徴については、清水 (1993b), (1994b) 参照。

西ゲルマン語の 2 グループに分かれる方言から成っている。⁸

古英語が北ゲルマン語やフランス語からの影響で歴史的に大きく変貌し、古ザクセン語も高地ドイツ語 (dt. Hochdeutsch) を中心とする標準ドイツ語の傘下に取り込まれた結果、フリジア語は北海ゲルマン語の唯一の後裔とされることが多い。しかし、これは、フリジア語が北海ゲルマン語の性格を忠実に今に伝えていることを意味するのではない。西フリジア語はオランダ語から、東フリジア語 (ザーターフリジア語) は低地ドイツ語と標準ドイツ語から、そして、北フリジア語はデンマーク語南ユトランド方言 (da. sønderjysk)、標準デンマーク語 (da. rigsdansk)、低地ドイツ語、標準ドイツ語から、それぞれ強い影響を受け続けてきた。任意のフリジア語のテキストを英語と比較すれば、このことは一目瞭然である。語彙、形態、語順のどれを取っても、現代のフリジア語との類似が目立つのは、かつては Anglo-Frisian とまで言われたほど近い関係にあった英語よりも、むしろ現在のフリジア語を取り巻く上記の諸言語であることに気がつく。⁹ 他の諸言語にもまして英語とフリジア語の深い歴史的な結びつきを想起させるのは、一部の比較的地味な音韻対応にとどまると言ってもよい。

口蓋化 (硬口蓋化) : engl. *cheese* ~ wfr. *tsiis* [tsi:s] ↔ dt. *Käse* < ahd. *kāsi* ~ ndl.

kaas [ka:s]

摩擦音の直前で n の脱落 : engl. *us* ~ wfr. *ús* [ys] ↔ dt. *uns* ~ ndl. *ons* [ɔns]

前舌母音 ↔ 中舌・後舌母音 : engl. *sleep/feel* ~ wfr. *sliepe* [slɪəpə]/*fiele* [fiələ]

↔ dt. *schlafen/fühlen* < ahd. *fuolen* ~ ndl. *slāpen* [slá:pə(n)]/*voelen* [vú:lə(n)]

現代フリジア語を形成する上記の西、北、および東 (ザーター) フリジア語の 3 者は、互いに著しく異なり、相互理解はまったく不可能である¹⁰。しかも、3 者に共通の標準フリジア語は存在せず、この章の冒頭で述べたように、正確には「フリジア語群」と呼ぶのがふさわしい。ただし、ここで問題なのは、2. で述べた「言語」と「方言」を峻別する社会言語学的な基準から見て、この 3 者がそれぞれ「フリジア語」としての下部単位を形成すると言えるかという点である。西フリジア語については、オランダ語と並んで、フリースラント州の地域公用語としてオランダ政府から公認され

⁸ 英語学などの専門書では、オランダ語を歴史的に低地ドイツ語に連なる低地ザクセン方言と標準オランダ語の基盤となった低地フランケン方言に区分せずに、低地ドイツ語と直接、結びつけて、両者を Low German とまとめている例が目立つ。北海ゲルマン語と内陸ゲルマン語を区別する今日ではほぼ通説となった考え方からすれば、これは厳密には正しくない。

⁹ 西フリジア語の例は清水 (2006), (2009)、北フリジア語の例は清水 (1994a), (2010b) 参照。

¹⁰ 北フリジア語の内部でさえ、とくに大陸方言 (dt. Festlandsnordfriesisch) と島方言 (dt. Inselnordfriesisch) の間では相違が激しく、前者の最も有力なベーキングハルデ方言 (dt. Bökingharder Friesisch/nfr. Bökinghiirder frasch)、通称モーリング方言 (nfr. mooring) と後者の最も有力なフェリング方言 (nfr. fering) の話者の間では、相互理解はかなり困難である。

ているので、問題はない。しかし、北フリジア語と東フリジア語（ザーターフリジア語）は、ニーダーザクセン州およびシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州から公用語としての認定は受けていない。両者は西フリジア語使用地域とは地理的に遠く離散しており、西フリジア語の方言とも言えない。公的機能の点では標準ドイツ語の完全な傘下にあることは疑いなく、上述の社会言語学基準からすれば「言語」とは認められないことになる。この点を直接的に反映させた意見として、北フリジア語と東フリジア語（ザーターフリジア語）をドイツ語の方言とみなした Goossens (1977: 49-50) がある。¹¹ しかし、今日ではこの見解は受け入れられていないと思われる。これまでも Walker (1983) など、フリジア語研究者からの反論も寄せられていた。両言語は 1992 年に制定された「ヨーロッパ地方言語・少数言語憲章」(dt. Europäische Charta der Regional- oder Minderheitensprachen) で公式に認定されている。現在の時点で、北フリジア語と東フリジア語（ザーターフリジア語）をドイツ語の方言とみなす意見を表明したら、おそらく物議を醸すことになるだろう。

フリジア語群の存続を支えるのは、上述の歴史言語学的な根拠に支えられた話者の意識である。ただし、独立の国家を持たない現地に根ざした古来 (dt. autochthon) の少数言語にとって、「言語」であることを主張し続けるためには、行政への働きかけを通じて、公的機関において言語擁護の努力を不断に行うことが不可欠である。西フリジア語については次章で詳述するが、北フリジア語では 19 世紀以来のフリジア運動

¹¹ In einem schmalen Streifen an der schleswigschen Westküste zwischen Husum und der deutsch-dänischen Staatsgrenze, auf den Halligen, Sylt, Föhr, Amrum und Helgoland sowie in den Kirchspielen Ramsloh, Strücklingen und Scharrel im oldenburgischen Saterland leben insgesamt noch gut 10 000 Personen, die Mundarten sprechen bzw. sprechen können ..., die man als friesisch bezeichnet. Der Unterschied zwischen diesen und den angrenzenden bzw. mit ihnen am gleichen Ort gesprochenen Dialekten ist so groß, daß man ohne Bedenken von einem Bruch reden kann. Man hat diese Feststellung meistens für ausreichend gehalten, um dem Friesischen den Status einer selbständigen Sprache zuzuerkennen. In dieser Meinung fand man sich durch die Existenz einer friesischen Kultursprache mit bestimmten Überdachungsfunktionen in der niederländischen Provinz Friesland gestützt. Diese Auffassung ist m. E. nicht befriedigend, weil erstens die Unterschiede zwischen den drei geographischen Gruppen Westfriesisch (in den Niederlanden), Ostfriesisch (im Saterland) und Nordfriesisch (an der schleswigschen Westküste, auf den vorgelagerten Inseln und auf Helgoland) so groß sind, daß man sie als Brüche interpretieren kann ..., wodurch die Bündelung dieser Gruppen zu einer „Sprache“ den Eindruck eines beliebigen Konstrukts erweckt. Zweitens werden die ost- und nordfriesischen Mundarten nicht von der friesischen, sondern ausschließlich von der deutschen Hochsprache überdacht. Für die Annahme einer friesischen Sprache mit ihr zugehörigen Dialekten in Nordfriesland kann also das Verwandtschaftskriterium nur unter schweren Bedenken, das Überdachungskriterium überhaupt nicht herangezogen werden. Da diese Mundarten von unserer Definition der deutschen Dialekte ohne weiteres erfaßt werden, betrachten wir sie als deutsch, selbstverständlich ohne sie der Frisistik als Forschungsgegenstand entnehmen zu wollen. Eine sprachhistorische Grundlage für ein vergleichendes Studium der drei friesischen Dialektgruppen ist zweifellos vorhanden ... (Goossens 1977: 49-50)

(dt. Friesische Bewegung) の努力が実を結び、1990 年にはシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の基本法にその存在が認められ、同言語とその文化を保護する必要性が明記されるに至った。2004 年には、同州の州議会において「フリジア語法」(dt. Friesisch-Gesetz)、すなわち、公的場面でのフリジア語の振興にかんする法律 (dt. Gesetz zur Förderung des Friesischen im öffentlichen Raum) が可決され、北フリースラント郡での北フリジア語の公的使用規定が検討されることになった。1965 年設立の Nordfriisk Instituut「北フリジア語文化研究所」(<http://www.nordfriiskinstituut.de>) とその母体組織である Nordfriesischer Verein「北フリジア協会」には、こうして北フリジア語の代表的擁護機関としての安定的な活動基盤が保証されることになった。¹²

一方、東フリジア語 (ザーターフリジア語) は公的擁護機関を欠いている。ドイツの知識人でもその存在を知らないことが多い。その不備を補うのが Interfriesischer Rat/Ynterfryske Rie「フリジア相互評議会」(<http://www.interfriesischerrat.de>) である。この組織は、1925 年にニーダーザクセン州北西部、フリースラント郡 (dt. Landkreis Friesland) の中心地イエーファー (dt. Jever) において、西フリジア人と北フリジア人が初の会合を持ったことにさかのぼる。1956 年には、東フリースラントの中心都市レーア (dt. Leer) で「フリジア評議会」(dt. Friesenrat/wfr. Fryske Rie) が結成され、50 周年にあたる 2006 年 2 月 9 日には、ドイツ国内で記念切手が発売された。

4. レーヴァルデンの西フリジア語文化擁護機関—Tresoar と Afûk

今回の科研費による出張は、Fryske Akademy「フリスケ・アカデミー」(以下、FA と略、<https://www.fryske-akademy.nl>) の新庁舎落成にあたって正会員として招待を受けて、記念式典に出席し、執筆中の著書について研究員からレビューを受け、資料収集を行う目的を兼ねていた。また、筆者が 1993 年 9 月から 1994 年 9 月までオランダ政府奨学金 (NUFFIC) の援助で客員研究員として滞在したフローニンゲン大学 (ndl. Rijksuniversiteit Groningen) を再訪し、フリジア語の研究教育状況を視察することも念頭に置いていた。FA はオランダ北西部、フリースラント州の州都レーヴァルデン (ndl. Leeuwarden/wfr. Ljouwert「リャウエト」) に置かれている。レーヴァルデンはローマ帝国期のテルプ (ndl./wfr. terp, 盛り土による小丘) を中心に発達した人口 10 万人弱¹³ の都市で、西フリジア語圏の中心地である。ただし、オランダ語話者が多数混在する中心部では、街頭で西フリジア語を耳にする機会はほとんどない。FA は旧市街北西部のオルデホーヴェ (ndl. Oldehove)¹⁴ が建つ広場に隣接する一角にあ

¹² 北フリジア語の擁護については、清水 (2002: 47-51, 52-54), (2004: 88-95), (2005: 126-128, 132-134)、その詳細は Steensen (1986) を参照。

¹³ 2017 年の統計では約 96,000 人。

¹⁴ 西フリジア語名は「オーデハウ」(wfr. Aldehou)。地盤沈下によって 16 世紀末に建設が中止

る。ここには、西フリジア語名で *Tresoar—Frysk Histoarysk en Letterkundich Sintrum* 「トレソアルーフリジア歴史文学センター」(<http://www.tresoar.nl>)¹⁵、*Afûk* (= *Algemiene Fryske Underrjochtskommisje*) 「西フリジア語教育委員会 (通称: アーフク)」(<http://afuk.frl>) と併せて、代表的な合計 3 つの公的機関が集中している。

Tresoar は、次に挙げる 3 機関を 2002 年に統合して設立された西フリジア語文学関係の研究機関である。その 3 機関とは、西フリジア語名で *Frysk Letterkundich Museum en Dokumintaasjesintrum* (FLMD) 「フリジア文学博物館」、*Provinsjale en Buma Bibleteek yn Fryslân* (PBF) 「フリースラント州立ビュマ図書館¹⁶」、*Ryksargyf Fryslân* (RAF) 「国立フリースラント文書館」である。*Tresoar* は資料館と博物館の機能も引き継いでおり、フリジア文学の展示も行っている。最近では、FA 等との協力で、全 4 巻、3,151 ページにわたる *Nieuwe Encyclopedie van Fryslân* 『フリースラント新百科事典』(2016) を編集している。フリースラント州とフリジア語文化をめぐるあらゆる情報をオランダ語による記述で網羅した同書は、それまでの代表的な類書 *Encyclopedie van Friesland* 『フリースラント百科事典』(1958, 1 巻 722blz.) と 1954 年以降の事項を収録した続編 *Encyclopedie van het hedendaagse Friesland* 『現代フリースラント百科事典』(1975, 2 巻 956blz.) に代わる記念碑的業績である。

Afûk は、西フリジア語の教育と普及を目的として 1925 年に設立された公的機関で、市民向けに各種の西フリジア語の講習を行っている。留学生も受け入れており、筆者が今回の滞在で知り合った香港出身の聡明な中国人学生もその 1 人だった。学校教育から成人教育までに必要な教材を多数開発しており、出版社と書店も兼ねてフリースラント関係の書籍を多数刊行している。最近では、オンライン版の西フリジア語コースも提供しており、登録すれば無料で利用できる。今回、*Afûk* の関係者とも面談する機会に恵まれて、執筆中の西フリジア語の著書に、同機関の教材から筆者が採取した A4 版 3,120 ページ分の例文を活用させていただく許可を得ることができた。

西フリジア語による書籍は、フリースラント州の通常の書店でも手に入る機会は少なく、その他のオランダ各地ではほとんど目にしないので、*Afûk* の意義はきわめて大きい。フリジア語文献の宝庫だった古書部門を備えたレーヴァルデンの *De Tille* 「デ・ティレ」は 2005 年、また、オランダ最大のディスカウント書店チェーンとして一世を風靡した *De Slegte* 「デ・スレヘテ」は、2013 年にそれぞれ倒産している。フローニンゲン大学に近接する位置に 3,000 m²の営業面積を誇っていた *Scholtens &*

され、未完となったまま現在に至っている斜塔で、同市のシンボルになっている。当初、予定されていた教会部分は着工されておらず、塔の部分だけが姿をさらしている。

¹⁵ *Tresoar* はフランス語の *trésor* 「宝物庫、古文書庫」にならった西フリジア語の語形で、フランス語やオランダ語の語形 *trezor* の発音に近づけて「トレゾアル」と呼ぶこともある。

¹⁶ フローニンゲン大学フリジア語学科の教授職を歴任した高名な古フリジア語研究者ビュマ (*Wybren Jan Buma* 1910~1990) にちなんだ名称。

Wristers「スホルテンス・エン・ヴリステルス」も、両者に続いて2013年に新興の Polare Nederland「ポラーレ・ネーデルラント」の傘下に入ったものの、早くも翌年に Polare Nederland が経営難に陥って倒産すると同時に消滅した。¹⁷ フローニンゲンの他の古書店も大多数が姿を消した。市内での資料収集は期待できなくなっている。さらに、従来のオランダの大学では、ドイツの諸大学と同様に、学部図書館が多数の専門文献を備え、基本的に開架式であることから、当該分野の研究史と現状を知る上で非常に有益である。しかし、今回の訪問では、フローニンゲン大学の文学部図書館は廃止され、総合図書館は改築工事の最中で、資料収集はできなかった。開架式閲覧室は利用可能だったが、以前と比べて目立った図書の補充はほとんどなされていなかった。文学部図書館の充実した専門文献は、容易に立ち入りできない書庫に収められる予定と聞いており、若い学徒が学問的指針を奪われることが懸念される。¹⁸

5. Fryske Akademy の組織と大学のフリジア語文化研究教育

FA は西フリジア語文化の学術研究機関として、長期間に及ぶ交渉の末にフリースラント州政府の承認と財政的援助を得て、1938年に設立された。¹⁹ そのステイタスは、FA が総計 15 の研究機関 (ndl. Instituten) から構成される KNAW—Koninklijke Nederlandse Academie van Wetenschappen「オランダ学士院(オランダ科学芸術アカデミー)」(<http://www.knaw.nl>) の一員である事実が雄弁に物語っている。2015年の統計²⁰によれば人員は61名で、研究員15名、博士号取得資格者8名、研究補助員13名、事務員16名、事務補助員9名となっている。男性54%、女性46%とほぼ均等で、²¹ 平均年齢は43歳、定年は65歳である。言語学、歴史学、社会学を中心に、

¹⁷ De Tille, Scholtens & Wristers, それにオランダ北部の De Slegte の支店等を引き継ぎ、オランダ北部のレーヴァルデン、ドラハテン (ndl./wfr. Drachten)、スネーク (ndl. Sneek/wfr. Snits「スニツ」)、フローニンゲンの各地に現在、新たに店舗を構えている書店は、Van der Velde「ヴァン・デル・ヴェルデ」である。ただし、筆者の印象では、併設された古書部門を含めても、以前の他書店での充実度には遠く及ばない。

¹⁸ 大学内の図書館統合は、他のヨーロッパ諸国にも共通の傾向と聞いている。以前、訪問したオスロ大学図書館の日本人司書による案内でも、同じことを経験したことがある。

¹⁹ 1938年設立という事実は、ナチズムがヨーロッパ中を震撼させ、オランダがその脅威にさらされていた当時の状況と無関係ではない。これはFAの設立に中心的役割を果たした人物の経歴にも、色濃く反映されている。その1人、中世カトリック神秘主義の研究者でネイメーヘン (ndl. Nijmegen) 大学学長を務めたブロンスマ (Titus Brandsma 1881-1942) は、ナチスに抵抗して逮捕され、ダハウ (dt. Dachau) の強制収容所で獄死し、1985年にローマ教皇から殉教者として聖人に次ぐ福者 (lat. Beatus) の位に列福されている。一方、古フリジア語および古ゲルマン諸語の専門家カプテイン (Johannes Marie Neele Kapteyn 1870-1949) は、ナチスドイツに与して「大ゲルマン思想」(ndl. Groot-Germaanse gedachte/wfr. Grut-Germaanske gedachte) を信奉し、その指令の下でフローニンゲン大学学長を歴任し、大戦後、オランダ政府から戦犯の宣告を受けて服役した。FAの創設事情については Frieswijk (2000) 参照。

²⁰ 2015年終了時の状況を2016年に総括した統計資料による。以下同様。

²¹ ただし、9. で述べるように、2015年終了時では常勤の研究員に女性は含まれていない。

言語学関係では文法、辞書、古フリジア語・歴史言語学、社会言語学の専門家が在籍している。文学研究は4.で述べた Tresoar、教育は Afûk が担当している。博士号取得資格者の枠が設けられており、大学のフリジア語文化研究とも密接な関係にある。優秀な若手研究者を援助することで学位取得を容易にし、大学の点検評価で重要な博士号授与数の増加に貢献する仕組みになっている。FA 出身の大学教員も多く、ほとんどがアムステルダムの2大学またはフローニンゲン大学から博士の学位を得ている。

FA はフローニンゲン大学との関係がとくに強いが、これには次の歴史的事情が関係している。フリースラントでは、レイデン大学 (1575～) に続いてオランダで2番目に古い時期の1585年に、古都フラーネケル (ndl. Franeker/wfr. Frjentsjer「フリエンチェル」) に大学が設立された。しかし、フランス支配 (ndl. Frans bewind) の時代 (1795～1813) に、ナポレオンの命令によって1811年に廃止され、それ以降、復興されることはなかった。²² 現在、オランダ北部には、フローニンゲン州に置かれたフローニンゲン大学 (1614～) しか存在しない。FA はかつてのフラーネケル大学 (ndl. Universiteit van Franeker/wfr. Universiteit fan Frjentsjer) の伝統を受け継ぎ、学術面でその後継機関としても任じている。フローニンゲン大学からフリジア語文化の関連分野で博士号を得る者には、フラーネケルの中心部に建つマルティーニ教会 (ndl. Martinikerk/wfr. Martinytsjerke) で学位授与式を受けることが許されている。

博士号取得へのFAの援助は、20年以上も前からオランダの大学で続いている厳しい定員削減措置による弊害に対処する意味でも、重要な役割を担っているように思われる。小国オランダでは、近年の大学改革の結果、ひとつの分野はひとつの大学で行うのが望ましいとされ、人文科学では英語学など、学生が殺到する少数の例外を除いて、マイナーな分野は次々に統廃合が敢行されている。筆者が研究滞在した時期と比較すると、フローニンゲン大学文学部でも、音声学、古ゲルマン語、低地ドイツ語、スウェーデン語以外の北ゲルマン語の専門家が後任を補充されず、事実上、途絶えることになった。なかには、定年前に職を解かれたケースもあると聞いている。フローニンゲン大学は、日本言語学会の招きで来日されたこともあるコステル教授 (prof. dr. Jan Koster)、2014年から日本独文学会の機関誌『ドイツ文学』(*Neue Beiträge zur Germanistik*) の国際顧問 (dt. Internationaler Beirat) をお引き受けいただいているアーブラハム教授 (prof. dr. Werner Abraham) を筆頭に、長らくヨーロッパの生成文法研究の中心地として知られてきた。しかし、今では言語学の比重は、学生にとって親しみやすく、学生数の獲得が見込まれる応用言語学 (ndl. toegepaste taalkunde) に大きく移行している。今回、コステル教授の後任で、オランダ語生成文法研究で国際

²² 同時にユトレヒト大学 (ndl. Universiteit Utrecht) とヘルデルラント州 (ndl. Gelderland) のハルデルヴェイク大学 (ndl. Universiteit van Harderwijk) も廃止された。この3大学の中で、ユトレヒト大学だけはフランス支配が終わりを告げた1813年に復活している。

的に著名なズヴァルト教授 (prof. dr. Jan Wouter Zwart) と再会する機会を得たが、理論言語学研究の斜陽傾向とさらなる大幅な教員削減への切実な懸念を耳にした。

フリジア語学文学についても、筆者の研究滞在当時は言語学 3 名と文学 1 名の専任教員がいたが、現在では 2 名に削減されている。今回、親しく懇談する機会を得たフリジア文学が専門のイエーンスマ教授 (prof. dr. Goffe Jensma) と英語を母語とする同僚のヒルトン博士 (frou dr. Nanna Hilton) がその担当教員で、それぞれオランダ語低地ザクセン方言と社会言語学を兼担している。Fries Instituut「フリジア語学科」のオランダ語名も正式には消え、学部段階 (ndl. Bacheloropleidingen) では Minorities and Multilingualism (o.a. Fries)「少数言語と他言語使用 (とくに (ndl. o.a.=onder andere) フリジア語)」という履修コースの枠で「学生は希望があれば特定の少数言語文化を履修できる。これはたとえば...フリジア語文化を専攻することで可能である...」(ndl. Studenten kunnen zich desgewenst specialiseren in een specifieke minderheidstaal en -cultuur. Dat kan ... bijvoorbeeld in de specialisatie Friese Taal en Cultuur ...) ²³ とされている。専修名が英語によるのは、「授業は英語で行われる」(ndl. Het studieprogramma wordt in het Engels aangeboden ...) という事情を反映している。²⁴ フリジア語学文学の名前で修士号を授与することも認められなくなり、事務職員も廃止され、院生の協力で研究室の運営をまかなっている。

オランダ全体で見ても、筆者の研究滞在当時には、フリジア語学文学はフローニンゲン大学に加えて、アムステルダム大学 (ndl. Universiteit van Amsterdam) とアムステルダム自由大学 (ndl. Vrije Universiteit Amsterdam) を併せた 3 大学に (少なくとも他分野と合同で) 学科として存在し、レイデン大学 (ndl. Rijksuniversiteit Leiden) にも古英語との兼担で専門家が在籍していた。しかし、現在ではフリジア語学文学の組織的自立性は失われており、フローニンゲン大学とアムステルダム大学に専門とする教員が名を連ねているだけである。アムステルダム大学のフリジア語学関係の教員は、FA 出身の社会言語学が専門のゴルテル教授 (prof. dr. Durk Gorter) ²⁵ の退任後、FA 出身で歴史言語学および言語地理学が専門のフェスロート教授 (prof. dr. Arjen Versloot) のみとなっている。アムステルダム自由大学では、中期フリジア語 (wfr. Midfrysk/ndl. Middelfries) および社会言語学が専門でフリジア語学を代表する存在だったファイツマ教授 (frou prof. dr. Tony Feitsma) とドイツ語学を兼担されていた古フリジア語が専門のメイエリング教授 (prof. dr. Henk Meijering) の退任後、

²³ フローニンゲン大学の HP (<http://www.rug.nl/bachelors/minorities-multilingualism/>) による (2017 年 9 月 20 日閲覧)。次の引用も同様。

²⁴ 筆者の研究滞在時には、フリジア語学科の授業は原則として西フリジア語で行われていた。

²⁵ Gorter のオランダ語名は「ホルテル」となるが、フリジア人なので、西フリジア語の発音に対応する「ゴルテル」とカナ表記している。本稿の他の人名についても同様。

後任は補充されていない。今回、FA での式典に続くパーティーの席上、レイデン大学で長らく古英語と古フリジア語を担当され、昨年、定年で退任されたブレメル教授 (prof. dr. Rolf Bermmer, Jr.) にお会いする機会を得たが、後任人事は行われていないという。²⁶ それでも、他国では行いがたい事情から、マイナー分野の代表格であるフリジア語学文学は、オランダ国内の上記 2 大学で存続を許されている。この例外的措置の背景には、筆者が師事した西フリジア語生成文法が専門のデ・ハーン教授 (prof. dr. Germen de Haan) が長年、フローニンゲン大学文学部の学部長として尽力された功績が大きいと聞いている。しかし、将来的な保証はない。オランダの大学では、90 分の授業時間の途中で休息をはさむことが多い。そんなときに、すでに筆者の研究滞在中、担当教員と生協食堂でお茶を飲んでよく話題になったのは、「予算削減」への切実な懸念だった。これにあたる西フリジア語の *besuniging* という語を知らなかった筆者は、「金が少なくなることだよ」(wfr. „Minder jild!“)と言われて初めて習得した覚えがある。オランダの大学レベルでのフリジア語文化研究教育は、他の人文科学の諸分野と共通して、近年、著しい衰退を余儀なくされている。

さて、FA には、西フリジア語を母語としないスタッフも含まれている。今回の訪問でも、式典後のパーティーで若手スタッフと知り合いになる機会を得たが、西フリジア語からオランダ語に切り替えて懇談したケースがあった。これは、FA が外部から他分野の人材を積極的に受け入れている事情による。広義のフリジア語文化に関連する領域にたいして、FA は積極的に門戸を開いている。これはフリジア人中心の内向きな組織運営に陥り、停滞と保守化を招くのを防ぐ措置と言える。

FA は 2 種類の会員を有しており、その会費によっても運営は部分的に支えられ、社会的認知と評価を仰ぐ仕組みになっている。まず、正会員 (wfr. leden) は、フリジア語文化研究への貢献によって任命されるもので、2015 年の統計で 304 名を数える。FA の研究員が正会員に任命されるのは、その職を離れた後の推挙と承認による。次に、賛助会員 (wfr. stipers) は、FA の活動に関心を抱き、それに賛同する一般人で、一定の年会費 (wfr. stipe) を収めれば、だれでもなることができる。2015 年の統計では 1,450 名にのぼっている。筆者はおもに北フリジア語関係の業績によって、1994 年 10 月にそれまでの賛助会員から総会の席で正会員に任命される荣誉に与った。

6. 付属施設 Mercator European Research Centre

西フリジア語は、ヨーロッパで公的擁護が最も充実した少数言語のひとつとして知

²⁶ レーヴァルデンに置かれていた MSU (=Mienskiplik Sintrum foar Underwiisbegelieding Fryslân)「フリースラント州教育委員会」のフリジア語学校教育セクションも、担当者のゾンダハ博士 (dr. Koen Zondag) の定年退任に伴って、以前に廃止されている。

られている。²⁷ FA がヨーロッパの少数言語文化擁護において指導的役割を担おうとする姿勢は、付属施設として Mercator European Research Centre on Multilingualism and Language Learning 「メルカートル・ヨーロッパ多言語使用・言語習得研究センター」(以下、「メルカートルセンター」と略、<https://www.mercator-research.eu>) を併設している事実からもうかがえる。メルカートルセンターは 1987 年に、欧州委員会 (engl. European Commission) の主導の下に設立された。その名称は、フランドル地方のリュールモンデ (ndl. Rupelmonde) の出身で、メルカトル図法による世界地図で名高い地理学者メルカートル (Gerardus Mercator 1512~1594) に由来する。メルカートルセンターの任務は、現代ヨーロッパの多言語社会の実体に即して、地域言語と少数言語の教育について調査、研究、普及を行い、最新の言語教育の指針を提供することにある。最も重要な貢献は *Regional Dossiers* である。ヨーロッパ各地域を対象としたシリーズで、紙媒体でも刊行されているが、上記の HP (ホームページ) から無料でダウンロードできる。本稿の執筆時点で 50 冊を数えており、下記の 1 点を除いて英語で刊行されている。当該地域での社会的状況に応じて少数言語として認める方針から、ドイツ語のような威信言語についても次の 5 点が上梓されている。フランス・アルザス、ベルギー、デンマーク、イタリア・南チロル、ロシア・ヤマル=ネネツ自治共和国での少数言語としてのドイツ語教育の現状を伝えており、日本のドイツ語教育では看過されがちな観点を補う意味でも重要な資料と言えよう。

Van der Schaaf, Alie/Morgen, Daniel (2001²) *The German Language in Education in Alsace, France*.

Darquennes, Jeroen (2004) *The German Language in Education in Belgium*.

Tästensen, Anke (2015) *The German Language in Education in Denmark*.

Huber, Ulrike/Mathá, Helmut/Taschler, Herbert (2017²) *The German Language in Education in South Tirol (Italy)*.

Р.И. Лапгандер (2016) *Ненецкий, хантыйский и селькупский языки в образовательной системе Ямала Российской Федерации*.

7. Fryske Akademy の活動

FA の活動は *Jierferslach/Annual Report* 「年間活動報告」として、西フリジア語と

²⁷ フリジア語文化の擁護運動は、政治的要求とは無関係に行われてきた。著名な作家である司馬遼太郎氏の記述とは異なって、フリースラントでは「ときにオランダからの独立が叫ばれたりする」(司馬 1994: 45) ことはない。また、「オランダでも北方の僻地というべき」(ib. 45) この地域は、上述のように「東フリースラント」(ib. 45) ではない。「州の首都のフローニンゲン市」(ib. 46) とあるのも、東側に隣接するフローニンゲン州の州都を誤って指している。

英語によるテキストで正会員と賛助会員に通知され、HP でも閲覧可能である。会員が集う機会としては Akademydei「アカデミーの日」が企画され、一般市民にも公開されている。今回の新庁舎落成記念式典も、この機会に行われた。この種の催事は、2015 年の統計では学会・研究会 22 回、講演会 63 回にのぼる。学会開催で FA が主導してきた代表的な例として、Fryske Filologekongres「フリジア文献学会議」がある。1956 年の第 1 回目から 3 年ごとに催され、2014 年に第 20 回目を数えたこの会議の成果は、ラテン語で *Philologia Frisica*『フリジア文献学』と題する叢書として刊行されてきた。2017 年 7 月 21 日に更新された FA の HP によれば、同会議は 2018 年 4 月に Frysk Geasteswittenskiplik Kongres/Conference on Frisian Humanities「フリジア人文科学会議」として、新たに継続されることになった。その理由は、「文献学」(wfr. filology) は言語学と文学でも稀になりつつ用語で、歴史学や社会学も扱う従来の内容に即していない点にあるという。1 年間遅らせて 2018 年に開催するのは、レーヴァルデンがマルタ共和国の首都ヴァレッタ (Valetta) とともに、2018 年の欧州文化首都 (dt. Kulturhauptstadt Europas) に指定されている事情も関係している。

FA の定期刊行物には *It Beaken* と *Ut de Smidte* がある。*It Beaken* (英語で The Beacon の意味) は FA の設立以来、年に 1~4 回発行されている学術誌で、論文と書評を中心にフリジア語文化一般の代表的論考が掲載される。筆者は編集部の依頼を受けて、オランダ語で書かれた最も詳細な西フリジア語の文法書 Popkema (2006) の書評 Shimizu (2007) をオランダ語で寄稿したことがある。*Ut de Smidte* (ドイツ語に訳せば Aus der Schmiede) は FA の活動状況を報告する広報誌で、年 2 回程度発行される。両者は FA の HP でオンライン化が進められている。²⁸ フリジア語学文学の学術誌には、フローニンゲン大学フリジア語学科協会 (wfr. Stifting Freonen Frysk Ynstitút oan de Ryksuniversiteit te Grins) が 1952 年から刊行している *Us Wurk* がある (ドイツ語に訳せば Unser Werk)。筆者は、論文 Shimizu (1993a) と書評 Shimizu (2018 印刷中) をオランダ語と西フリジア語で寄稿している。同協会はドイツのキール大学フリジア語学科 (dt. Abteilung für Frisistik, Christian-Albrechts-Universität zu Kiel) と共同で、フリジア語文化研究シリーズ *Estrikken/Ålstråke* (「床用のタイル」の意味、西フリジア語/北フリジア語のタイトル併記) を刊行している。筆者はドイツ語による論文 Shimizu (2013) を寄せている。²⁹

FA の学術的成果は膨大だが、その代表例として *Wurdboek fan de Fryske taal*/

²⁸ 詳細は FA の HP に収められた次のサイトを参照 : <https://argyf.fryske-akademy.eu/fryske-akademy/utjeften/it-beaken/>, <https://argyf.fryske-akademy.eu/fryske-akademy/utjeften/ut-de-smidte/>

²⁹ フリジア語学に特化した学術誌には、FA の研究員を中心とする有志によって刊行されていた *Tydskrift foar Fryske taalkunde*『フリジア語学研究誌』があったが、1985~1995 年まで 10 巻 (各巻 3 分冊で合計 30 冊) を数えた段階で途絶えた。

Woordenboek der Friese taal. 25 dln. 『フリジア語オランダ語辞典全 25 巻』(1984～2011, 略称: *WFT*) がある。これはオランダ語での記述による西フリジア語最大の辞典である。オランダ語には世界最大級の *Woordenboek der Nederlandsche Taal. 29 dln.* 『オランダ語辞典全 29 巻』(1864～1998/補遺 3 巻 2001, 43 分冊、略称: *WNT*) がある。³⁰ *WFT* は *WNT* を模範として、FA の辞書部門の総力を結集して編纂された。2010 年 7 月 6 日には、FA の主催で行われた *Euralex International Congress* 「ヨーロッパ国際辞書学会」の席上、オランダ王室から臨席された当時のベアトリクス女王 (Koningin Beatrix) の手でオンライン化の実施がなされた。*Geïntegreerde Taalbank. Historische woordenboeken op internet* 「統合言語データベース—インターネット歴史言語辞典」(<http://gtb.inl.nl>) は、オランダ語圏を代表する複数の辞書編集機関の共同作業で開発されたサイトで、*WNT* と *WFT* を含む 5 種類の代表的なオランダ語辞典が閲覧可能になっている。FA によるもうひとつの顕著な業績には、*Frysk Hânwurdboek a-m/n-z* 『西フリジア語辞典 a-m/n-z』(2008、略称: *FH*) が挙げられる。XXII+2,391 ページに及ぶ 2 巻本のこの辞典は、西フリジア語で記述された初の西フリジア語辞典で、現代西フリジア語の理解には欠かすことができない。

8. Fryske Akademy の運営

FA の運営は、研究部門の責任者である所長 (wfr. *direkteur-bestjoeder*) と事務部門の責任者 (wfr. *haad algemiene saken*) が司っている。所長はすべての活動を管轄し、監査評議会 (wfr. *Rie fan Tafersjoch*) への説明責任を負っている。私事にわたるが、FA との出会いは、上述のフローニンゲン大学滞在を始めた頃、レーヴァルデンから戻る夕方の列車の中でのことだった。4. で述べた *De Tille* の古書店で買い集めた西フリジア語の古書をショッピングカートから 1 冊ずつ取り出して眺めていたところ、向かい側にすわっていた紳士が合図をするので、言葉を交わすと、FA の当時のヨーンスマ所長 (dr. *Lammert Jansma*) と知って驚いた。西フリジア語の文法を日本語でまとめる計画を告げると、FA を一度、訪ねるように勧められた。所定の日に伺うと、研究員たちに紹介され、施設内に机と椅子を用意されて、自由に使って良いとの許可をいただいた。こうして知り合いになった数多くの研究員からは、博士論文の執筆、ならびにそれを基礎にして学術振興会から出版助成金を得て出版した拙著 (清水 2006) をまとめる過程で、感謝し尽くせないほど援助を受け、今日に至っている。

そのヨーンスマ所長が 2005 年に起こった FA の財政危機の責任を取って職を辞したことを知って、筆者は非常に驚いたことがある。当時、FA は情報化を推進しており、大量の情報機器の購入などで負債が膨らみ、事務部門のミスが重なってオランダ学士

³⁰ 『オランダ語辞典全 29 巻』(*WNT*) の編纂と成立過程については、清水 (2008: 328-329, 333), (2010a: 228-230) 参照。

院で問題となったと聞いている。代わりに所長の職に就いたのが、言語学が専門のソルヴェダ教授 (prof. dr. Reinier Salverda, 1948～, 所長在任期間 2006. 6.～2013. 11.) だった。オランダ語学文学の重要拠点として知られるロンドン大学から抜擢されたソルヴェダ氏は、穏やかで洗練された物腰の長身の紳士だが、卓抜な事務能力の持ち主で、優れた指導力を発揮して FA を財政的にも組織的にも見事に立て直し、庁舎の増改築にまでこぎ着けることに成功した。後任のブロント所長 (prof. dr. Hanno Brand, 1959～, 所長在任期間 2013. 12.～) も、今回の訪問で知己を得た印象では、歴史学者としての卓抜な業績に加えて、いかにも有能で堅実な実務家である。³¹

FA の庁舎は、西フリジア語で Coulonhûs 「クロンフース」と呼ばれる。「Coulon の家」の意味で、フランスからオランダへ逃れたユグノー教徒クロン (Anthonius Coulon 1682～1749) が 1713 年に建造した由緒ある建物である。今回の改築では、外観を保ちつつ、内装を大きく近代化させ、メルカートルセンターと所長執務室および事務部門のスペースに当てて、研究員は隣接する教会を解体して建て替えたモダンな建物に移った。かつての教会は、筆者が以前、訪れたときには、上述のフリジア文献学会議の会場にも利用されていたが、そのような歴史的建造物を天井に梁の木材をいくつつか残して取り壊すことが許されたとは意外だった。さらに驚いたのは、書架などの並ぶ中央の広いスペースを囲むように配置された研究員の各部屋が、四方を透明のパティションで仕切られて、外から丸見えであることだった。そもそもオランダ人は、夜になっても自宅の居間のカーテンを閉めないことが多い。これは、自己の挙動にやましいところがないことを示すカルヴァン派的精神に由来するとも言われる。今回の記念式典に臨席されたオランダ学士院院長のヴァン・デイク教授 (mevr. prof. dr. José van Dijk) も、祝辞の中で「革新的な研究は、近代的で透明な労働環境の中でこそ最も栄えるものです」(ndl. „Vernieuwend onderzoek floreert het beste in een moderne en transparante werkomgeving.“ *Ut de Smidte* 50/2 (2016)) と述べておられた。真新しい FA の内部を隅々までご案内いただいたメルカートルセンターのファン・デル・メール所長 (drs. Cor van der Meer) に、「苦情はないのですか」とたずねたところ、「だいたい満足していますよ」と笑みを浮かべて返事をされていた。

今回の増改築の費用は 700 万ユーロであり、オランダ学士院が 230 万ユーロ、州政府が 230 万ユーロを援助し、FA がその基金から 240 万ユーロを拠出している。2017 年 9 月 8～9 日に行われた記念行事は、落成記念講演会、記念式典、新正会員任命式に続いて、新庁舎の一般公開、祝宴から成り、来賓として上記のオランダ学士院院長、州政府の文教政策担当議員、それにオランダ王室からラウレンティーン妃殿下

³¹ 2017 年 12 月 17 日付けの FA の HP によれば、ブロント所長は 2018 年内に 5 年間の第 1 期目の任期終了後、所長職を退任し、再び研究に専念する意向を公式に表明している。同氏はすでに現在、フローニンゲン大学の歴史学の教授職を兼任している。

(H. K. H. Prinses Laurentien)³² が列席された。参加者は 250 名を上回り、用意された椅子はほぼ満席だった。18 世紀の貴族の衣装をまとったクロンを俳優に演技させて来客たちの緊張を解き、ヴァン・ダイク院長の挨拶にも登場させて笑いを誘った演出は、きさくで権威主義を嫌ういかにもオランダの人々らしい粋な計らいと思われた。

9. FA の新体制と課題

こうした和やかな雰囲気の中で新しい環境を祝った FA だが、その運営には厳しい条件が付されている。5. の冒頭で言及した研究組織は、以前は専門分野別構成 (wfr. faggroepstruktuer) だったが、2015 年 9 月から廃止され、6 年単位のプロジェクト体制 (wfr. projektorganisaasje) に完全に移行することになった。FA の運営は、オランダ学士院から派遣される外部監査によって、達成度を評価されて決定される仕組みに変わったのである。最初の視察委員会は、形態論研究の世界的権威で、日本言語学会の招きで近年、来日されたこともあるレイデン大学のボーイ名誉教授 (em. prof. dr. Geert Booij) を団長として、2015 年 11 月に FA を訪れ、2009～2014 年の成果を評定している。Ut de Smidte. 50/1 (2016) に掲載されたブロント所長の演説によれば、「研究の社会的関連性」(wfr. maatskiplike relevânsje fan it ûndersyk) については「卓越したレベル」(wfr. eksellint nivo) にあるとされた。FA はフリースラント州に固有の言語文化を基盤としているので、社会的関連性の点で評価が高いのは当然と言える。FA には社会諮問評議会 (wfr. Maatskiplike Advysried, MAR) を置いて助言を仰ぎ、州との連帯と社会的貢献を目指すことが規約に定められている。2016 年 7 月 6 日には、同評議会の席上で「フリスケ・アカデミーは私たちのものだ」(wfr. „De Fryske Akademy is fan ús.“) と題する声明文が発表された。ただし、従来にも増して、FA にはその理念の実現に腐心することが求められるのは必至である。

一方、研究成果自体の評価は「標準以下」(wfr. ûnder de mjitte) とされた。これは自然科学系の研究機関を含むオランダ学士院が定める基準に照らしての評価であり、視察団からは基準を見直す意見も出されたという。2015～2020 年の新プロジェクト期間には、大規模な情報通信技術 (ICT) のネットワークを用いた研究成果のオープンアクセスと国際化、国際的に権威ある学術誌への論文掲載数の増加、常勤研究員に占める女性の割合の向上が求められている。こうした 6 年ごとのプロジェクトの設定と視察委員会による業績評価は、独立行政法人への移行後の日本の国立大学と共通しており、具体的改善点の指摘も日本の大学の人文科学にほとんど該当すると言えよう。

10. オンライン化とその問題点一文法記述

³² 同妃殿下は、オランダ国王の弟であるコンスタンティン殿下 (Prins Constantijn der Nederlanden) の后であられ、日本の皇室では紀子様に相当する地位に就かれている。

上記の改善点の中で、研究成果のオープンアクセスと国際化については、FA は 2015 年に Taalportaal (「言語ポータルサイト」の意味、<http://www.taalportaal.org>) を開設したことで、すでに顕著な改善を遂げている。これは英語によるオランダ語と西フリジア語の大規模な文法記述のサイトで、項目別に相互に対照可能である。アフリカーンス語文法についても目下、作成が進んでいる。アムステルダムの Meertens Instituut「メールテンス研究所」(<http://www.meertens.knaw.nl>)、7. で述べた WNT の編集で知られるレイデン大学の Instituut voor Nederlandse Taal, INT「オランダ語研究所」(<http://ivdnt.org/>) などとの協力で、Nederlandse Organisatie voor Wetenschappelijk Onderzoek (NOW)「オランダ学術振興会(オランダ科学研究機構)」(<http://www.nwo.nl/>) から 2010 年以降、170 万ユーロの財政援助を受けて構築された画期的な業績である。この援助額は人文科学全体で見ても、オランダで過去 2 回目の最高金額となった。ただし、筆者の意見では難点もある。まず、全体の把握が困難である。細分化された項目ごとにクリックして次々に記述内容を得る仕組みだが、目隠ししたまま巨大な象の体に触れるのにも似て、体系的把握が妨げられ、もどかしい印象を禁じ得ない。オランダ語文法の部分は、基盤となっているアムステルダム大学出版会刊行の空前絶後と言うべき記述量を誇る *Syntax of Dutch* (Broekhuis et al. 2012~)³³ でも参照できる。しかし、西フリジア語については、紙媒体での出版は予定はないという。これは、この大プロジェクトがオンライン化によって、世界中どこでも無償で英語を通じて利用可能にすることを目的としていることによる。

じつは、FA はかなり前から、オランダ語で記述された最大のオランダ語文法書で、xxviii+1,717 ページに及ぶ 2 巻本の Haeseryn et al. (1997²) (通称 *ANS*) に匹敵するものを目指して、西フリジア語による大規模な西フリジア語文法書を編む計画を立てていた。筆者は FA のフィセル博士 (dr. Willem Visser) とディク博士 (dr. Siebren Dyk) から草稿の一部を以前から送られていたが、今回、パーティーの席上、ワイングラスを片手にディク博士にたずねたところ、「あれはもうやめたよ」とのことだった。つまり、フリジア人は自らの言語で母語の文法を書く機会を奪われたのである。

これは日本のゲルマニストにとっても、他人事ではない。筆者は 2013 年 5 月～2017 年 5 月の 2 期 4 年間、日本独文学会編集委員会で語学部門編集責任者を務め、編集理事とともに学術振興会の科学研究費補助金・研究成果公開促進費「国際情報発信強化」の申請にあたったが、2016 年と 2017 年ともに不採択となった。その主な理由は、機関誌を紙媒体で発行しており、費用的に無駄であること、また、申請対象の欧文誌 *Neue Beiträge zur Germanistik* はドイツ語による刊行物であり、英語によらな

³³ 同書は Van Riemsdijk, Henk/Kenesei, István (eds.) *Comprehensive Grammar Resources* の一環として企画され、第 8 巻 (*Miscellaneous Topics*) を除いて、すでに計 7 巻が刊行されている。ハンガリー語、中国語 (Mandarin) などの文法記述も計画されているという。

ければ国際化とは認められないというものだった。しかも、1年ごとの申請には、そのつど何らかの新機軸を織り込むことが求められる。これはきわめて実現困難な課題である。日本独文学会の財政は科研費取得に大きく依存しており、このまま不採択が続けば、数年後には深刻な事態に至ることは明白である。学問のありかたと学会の存続が大きな岐路に立たされていると言えよう。Taalportaal の構築は、数年単位の短期間で可能になったものではない。上記の *Syntax of Dutch* はすでに 4,000 ページ以上の記述量に達しており、多数の研究者による積年の努力の結晶にほかならない。西フリジア語文法についても同様であり、当初の計画に沿って、ディク博士が西フリジア語で執筆した A4 版 110 ページにのぼる形容詞の草稿を筆者が受け取ったのは、2005 年にさかのぼる。「170 万ユーロごときで目がくらんでいては、西フリジア語に失礼ですよ」という筆者の揶揄に、ディク博士は複雑な笑みを浮かべていた。

11. オンライン化とその問題点—正書法と辞書記述

オンライン化の問題は辞書記述にも見られる。FA はフリースラント州政府の援助で、代表的な 5 種類の西フリジア語辞書が検索可能なサイト Wurdboekportaal (「辞書ポータルサイト」の意味、<https://taalweb.frl/wurdboekportaal>) を立ち上げている。そこで表明されたのが、フリースラント州議会で可決され、2015 年 1 月 30 日に施行された正書法改正である。1938 年の設立以来、FA は西フリジア語の正書法制定に尽力してきた。初の公式正書法は、1879 年に FA の前身のひとつである Selskip foar Fryske Taal- en Skriftekennisse 「フリジア語学文学会」が制定した「学会正書法」(wfr. Selskipsstavering) だが、FA は 1945 年に新たに「アカデミー正書法」(wfr. Akademystavering) を採択した。1969 年以降はフリースラント州議会の承認を経て、1980 年に現在の正書法を制定している。2015 年の改正は近年のオランダ語の場合と似て、主として外来語にかかわるものだが、全部で 4 つの改正点の中で注意を要する以下の 3 点には、本来の西フリジア語の語彙にかかわる 2 点も含まれている。

1) [iu] のつづり

旧正書法 : iuw, ieu とつづる (*miuw* [miu, mju, mjou] カモメ (ndl. meeuw [meːu])↔

ieu [iu] 世紀 (ndl. eeuw [eːu]))>新正書法 : すべて iuw とつづる

変更点 : 次の 3 語 (および派生語と複合語) にとどまる

旧正書法>新正書法 (以下同様) : *ieu*>*iuw* 世紀 (ndl. eeuw [eːu]), Hebriewsk>

Hebriuwsk ヘブライ語 (ndl. Hebreeuws [heˈbrɛːus]), *Sieusk*>*Siuwsk* ゼーラント地方の (ndl. Zeeuws [zeːus])

2) [u]/[u:] のつづり

旧正書法 : û とつづる (*slûs* [sluːs] 水門 (ndl. sluis [slœys])<âfr. slūs)

古フリジア語の長母音 *ō* は *oe* (*boek* [buk] 本 (ndl. boek [bu:k]) < âfr. bōk)

ただし、オランダ語で *oe* の場合は *oe* とする (*poes* [pus] 猫 (ndl. poes [pu:s]),
koek [kú:kə] ケーキ (ndl. koek [ku:k]))

その他の *oe* は [uə] を表す (*poer* [puər] 純粋な (ndl. puur [py:r]))

>新正書法：古フリジア語は前提とせず、*û* [u]/[u:] とつづる。ただし、オランダ語で *oe* とつづる場合は *oe* [u]/[u:] とする。

変更点：約 40 語で *oe* > *û* と変わる。高頻度の語は 3 語 (+派生語・複合語) のみ：
droech [drux] > *drûch* 乾いた (ndl. droog [dro:x]) (út)*noegje* [(ýt)nu:ɣjə] > (út)*nûgje* 招待する (ndl. (uit)nodigen [(éyt)noːdəɣə(n)]) *stoef* [stuf] > *stûf* 陰しい、はなはだしい (ndl. 対応語なし)

区別できるようになった例にも、新たなあいまいさが生じていることがある。

旧正書法：*boek* [buk] 本 (ndl. boek [bu:k]) ~ *boek* [bu:k] ブナ (ndl. beuk [bø:k]) ↔ *bûk* [buk] 腹 (ndl. buik [bœyk])

>新正書法：*boek* [buk] 本 ↔ *bûk* [bu:k] ブナ ~ *bûk* [buk] 腹

3) 外来語のつづり

旧正書法：原語の語頭が *v/z* の場合は *f/s* に変更する。発音も無声音 *f* [f]/*s* [s] が多い。ただし、複合語・派生語の語中では有声音 *[v]/[z]* を表す *v/z* の場合があるので、無声の発音に対応していない。

>新正書法：複合語や派生語の内部でも *v* > *f*, *z* > *s* と変更し、実際の無声の発音と対応させる (ほとんど *v* > *f* の変更が該当)

televyzje [te:lɛfɪzjə] > *telefyzje* テレビ (tele- + *-fyzje* < *-vyzje*)

ynvalide [ɪˈfali:də] > *ynfalide* 障害者、障害を負った (yn- + *-falide* < *-valide*)

詳細は上記のサイト Taalweb (<https://taalweb.frl/>) に記され、対象となる単語リストが掲載されている。ただし、本稿の執筆時点では、この改正は Taalweb のオンライン辞書 Wurdboekportaal だけに反映されており、紙媒体の辞書は旧正書法のままで市販され続けている。上記のサイトにも、*advys* [atfɪs] 「助言」、*ynventaris* [ɪˈfəntá:rəs] 「目録」のように旧正書法で記載されている語、*universiteit* [f] (Zantema (1984: 1116), *FH* (2008: 2188)/[v] (Dykstra 2000: 765) 「大学」のように発音表記が一定しない語、*revolúsje* [re:vo:lýʃə] 「革命」のように有声音 *v* [v] の語などが含まれている。

もうひとつの問題点は、優先語形 (wfr. foarkarswurd) である。標準西フリジア語の規範は自由度が高い。英語にも *color* (米)/*colour* (英) など標準変種による異形があるが、西フリジア語では辞書の見出し語にいくつも語形が併記されることがある。地域公用語としての要請から、2015 年には優先的に使う語形が定められることになった。詳細は Taalweb の Foarkarswurdlist foar it Frysk (<https://taalweb.frl/foarkarswurdlist>) で検

索できる。たとえば、「ジャガイモ」では *ierappel* が優先語形とされているが、多くの優先語形に共通して、これはオランダ語の *aardappel* に近い。優先語形はおよその指針を示すもので、義務的ではないが、西フリジア語的な *jerappel*, *ierpel*, *earpel*, *jirpel* などの異形は敬遠されることになる。外来語についても、*tillefoan*「電話」/*sitewaasje*「状況」/*perfester*「教授」などは、優先語形 *telefoan/situassje/ professor* に道を譲り、オランダ語の *telefoon/situatie/professor* に近づく。これは西フリジア語の独自性を損じることにつながる。1980 年の改正ではオランダ語との距離を保つために、人為的とも映る工夫がなされたのとは対照的と言わざるを得ない。³⁴

今回、この改正を主導し、7. で述べた 2010 年の *Euralex International Congress* の大会で会長を務めた FA 客員研究員のディクストラ博士 (dr. Anne Dykstra³⁵) に以上の懸念を伝えたが、「州議会の承認を得ており、以前の正書法は誤りとみなされる」という返事だった。この改正施行に先んじて、FA は *Standertwurdlist en stavering*「標準語彙集と正書法」という公開シンポジウムを開催している (*Ut de Smidte* 47/2 (2013) 参照)。そもそもオランダ語圏では、長らく北部のオランダと南部のベルギー・フランドル地方で別々の正書法を用いていた時代が長く続き、南北統一正書法が施行されたのは、オランダでは大戦後の 1947 年、ベルギー・フランドル地方では 1946 年である。上述の 1945 年の「アカデミー正書法」は、オランダ語統一正書法の制定と同じ時期に行われた。オランダ語では、原則として 10 年ごとに正書法改正がなされ、当初は「優先つづり」(*ndl. voorkeurspelling*) を認めて、両国の相違による異形を完全には排除せず、その後は優先つづりを単一化し、外来語のつづりも徐々にオランダ語化して現在に至っている。³⁶ 近年の新正書法が物議を醸したドイツ語圏とは異なり、オランダ語圏では西フリジア語圏も含めて、正書法改革は特別な出来事ではない。とは言え、わずかな語彙にしか当てはまらず、外来語の発音にも異同があり、西フリジア語の独自性を損なうような改革は、好ましいと言えるだろうか。筆者の目には、オランダ学士院による社会的関連性の点検評価へのリップサービスとも映った。

12. 終わりに

近年のヨーロッパ少数言語擁護の高まりには、疑う余地がない。フリジア語の「言語」としてのステイタスは確立しており、フリジア語擁護の必要性は広く共有されている。問題はその具体的実現にある。今回、フローニンゲン大学再訪の折に、同大学の元教員で現在は FA 客員研究員のデ・グラーフ博士 (dr. Tseard de Graaf) の紹介

³⁴ 1980 年の西フリジア語正書法改正の具体例については、清水 (2006: 90-91) 参照。

³⁵ この Anne [ʔ:nə] は男性名「オーネ」で、『アンネの日記』の女性名 Anne とは異なる。

³⁶ オランダ語統一正書法の制定と成立過程については、清水 (2010a: 233-237) 参照。最近の 10 年間は、新たな改正は見送られている。

で、東アジア研究のデ・ヨング教授 (mevr. prof. dr. Janny de Jong) と面談する機会を得たが、誘いを受けた講演のタイトルは、「2100年には日本の人口は5千万人に減少する」というものだった。アイスランドを除くいわゆる先進国に共通のこの悩みを端緒に、大学の学問は甚大な変質を被るだろう。高齢者の介護は介護ロボットの開発で補える部分はあっても、手塚アニメのようにロボット兄妹を学校に通わせるわけにはいかない。筆者の研究滞在当時に比べて、オランダの大学ではフリジア語文化研究が大きく後退し、FAの存在がことのほか際立つ印象を受けた。しかし、FAは厳しい現実的対応を継続的に求められている。これは日本の人文科学と大学全体を取り巻く切迫した現状に直結し、近い将来を告示しているように思われる。ただ、ひとつ言えるのは、フリジア語研究は国際的認知を求められており、これに強い関心を寄せているという事実である。日本人としてフリジア語を学ぶことは、けっして高尚な趣味にとどまらない。フリジア語に向き合うとき、筆者は身の引き締まる思いがする。

参考文献

- Broekhuis, Hans et al. (2012~) *Syntax of Dutch*. Amsterdam. Amsterdam University Press.
- Dykstra, Anne (2000) *Frysk-Ingelsk wurdboek/Frisian-English Dictionary*. Ljouwert. Afûk/Fryske Akademy.
- Encyclopedie van Friesland*. (Brouwer, J. H. et al. (red.)). (1958) Amsterdam/Brussel. Elsevier.
- Encyclopedie van het hedendaagse Friesland. 2dln.* (Abma, Gerben/Jansma, Klaas (red.)). (1975) Leeuwarden. Van Seijen.
- FH (= Frysk Hânwurdboek a-m/n-z)* (Duiff, Pieter/Van der Kuip, Frits et al. (red.)). (2008) Ljouwert. Fryske Akademy/Afûk.
- Frieswijk, Johan (2000) „De oprjochting fan 'e Fryske Akademy (1938)“. *It Beaken* 62. 245-265.
- Goossens, Jan (1977) *Deutsche Dialektologie*. Berlin/New York. De Gruyter.
- Haeseryn, Walter et al. (1997² (1984)) *ANS (=Algemene Nederlandse spraakkunst. Bd. 1-2)*. Groningen/Deurne. Nijhoff/Wolters Plantyn.
- Nieuwe Encyclopedie van Fryslân. A-E/F-K/L-R/S-Z*. (Schroor, Meindert et al. (red.)) (2016) Gorredijk/Leeuwarden. Bornmeer/Tresoar.
- Popkema, Jan (2006) *Grammatica Fries. De regels van het Fries*. Utrecht. Het Spectrum.
- 司馬遼太郎 (1994) 『オランダ紀行—街道をゆく 35』朝日新聞社.
- 清水 誠 (1992) 「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法—V. Tams Jörgensen: Kort spräkeliir foon dât mooringer fräsch 訳注」『北海道大学文学部紀要 40-3』65-162.
- Shimizu, Makoto (1993a) „Naar aanleiding van Hitoshi Kodama, *Fryske grammatika*“. *Us*

- Wurk. 42/3-4. 103-114.
- 清水 誠 (1993b) 「言語接触とゲルマン語の類型 (1)—フリジア語群を中心に」『独語独文学研究年報 第 20 号 青柳謙二教授退官記念号』北海道大学ドイツ語学・文学研究会』283-299.
- 清水 誠 (1994a) 「北フリジア語モーリング方言の音韻」岩崎英二郎 他『ドイツ語学研究 2』クロノス. 445-503.
- 清水 誠 (1994b) 「言語接触とゲルマン語の類型 (2)—フリジア語群を中心に」『独語独文学研究年報 第 21 号』北海道大学ドイツ語学・文学研究会. 1-6.
- 清水 誠 (2002) 「フリジア語群の三つの生態と多言語使用」『ドイツ文学 108』日本独文学会. 46-58.
- 清水 誠 (2004) 「フリジア語とフリジア人について」『独語独文学研究年報 第 31 号 植木迪子教授退官記念号』北海道大学ドイツ語学・文学研究会. 82-98.
- 清水 誠 (2005) 「フリジアー北海沿岸を結ぶ言語の絆」綾部恒雄 (監修)/原 聖・庄司博史 (編)『講座 世界の先住民族 第 6 巻 ヨーロッパ』明石書店. 120-137.
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会.
- Shimizu, Makoto (2007) „Besprek. Jan Popkema (2006) *Grammatica Fries. De regels van het Fries*“. *It Beaken. 69. Nûmer 3/4*. 142-149.
- 清水 誠 (2008) 「オランダ語」石井米雄 (編)『世界のことば・辞書の辞典 ヨーロッパ編』三省堂. 326-341.
- 清水 誠 (2009) 「フリジア語」梶 茂樹 他 (編)『事典 世界のことば 141』大修館. 448-451.
- 清水 誠 (2010a) 「オランダ語研究の歴史と言語規範の形成」北海道大学文学研究科言語情報学講座編『言語研究の諸相』北海道大学出版会. 183-252.
- 清水 誠 (2010b) 「フリジア語」町田 健 (監修)『ニューエクスプレス・スペシャル ヨーロッパのおもしろ言語』白水社. 68-87.
- Shimizu, Makoto (2013) „Die *be*-Verben im Westerlauwersschen Friesisch“. *Twenty-Nine Smiles for Alastair. Estrikken/Ålstråke 94*. 251-265.
- Shimizu, Makoto (2018 印刷中) „Besprek. Hitoshi Kodama, *Japansk-Frysk wurdboek (jap. Nihongo-furijiago jiten)*“. *Us Wurk. 66/3-4*. 163-168.
- Steensen, Thomas (1986) *Die friesische Bewegung in Nordfriesland im 19. und 20. Jahrhundert (1879-1945)*. Neumünster. Wachholtz.
- Walker, Alastair (1997) „Nordfriesisch—Ein deutscher Dialekt?“ *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik 50*. 145-160.
- Zantema, J. W. (1984) *Frysk Wurdboek. Frysk-Nederlânsk*. Drachten/Ljouwert. Osinga.
- (北海道大学文学研究科 教授)